

北海道産学官連携センター

中川 充¹⁾

1. 北海道支所から地質調査連携研究体への移行

独立行政法人化による産業技術総合研究所発足に伴い、2001年4月地質調査所北海道支所は北海道産学官連携センターの下「北海道地質調査連携研究体」に移行した。初代体長は太田英順^{えいじゆん}。共同研究、技術指導等を通じて地域ニーズに対応する研究を遂行するのがミッションであり、具体的にはITを活用したデジタル地質情報システム開発である(金原, 2001)。その一環として、「北海道地質ガイド」をCD-ROMで出版し、翌2002年には第2版も作られた。

移行直前の2000年3月に噴火した有珠山周辺の現地を訪ねる、全国の高校生を対象としたサイエンスキャンプ(日本科学技術振興財団主催)を8月に開始する(高橋, 2000)。以降、2007年まで毎夏に実施した。地質情報の広報に向け2002年には札幌市博物館活動センターを会場に地質図展を開催した(「北海道の地質図展」開催事務局, 2003)。

産総研の拠点集約化に伴い、2004年1月に札幌駅北の札幌第1合同庁舎から豊平区月寒東の北海道センターに移転した。ほぼ同時期に産学官連携窓口として「札幌大通りサイト」が開設され、その業務に集中させるべく体長を太田より筆者(中川)が引き継いだ。なお、スペースの縮小に伴う資料の整理と情報普及に資するよう、前年に「地質調査所出版物活用市」を開催している。また、産総研と北大との包括連携協定が2005年2月に締結され、地質分野の調整を担った。

ほぼ、官職指定的な側面が強い「北海道環境審議会温泉部会専門委員」(2011年より8年間、部会長を務める)も2006年より太田から筆者(中川)が引き継ぐことになるが、組織としての「北海道地質調査連携研究体」は、同年3月末で廃止となった。奇しくも同年、「札幌及び周辺部地盤地質図」CD-ROMが出版された。

2. 北海道産学官連携センター

残存3名(1名は2005年につくばセンターへ異動, 1

名は2009年に定年退職)は、北海道産学官連携センターの業務を行いつつ、GSJ各部署の併任としてこれまでの業務を縮小継承した。前任の太田より引き継いだ委員系業務は、「休廃止鉱山鉱害対策委員会」(2009-2022年)、「北海道地方鉱山保安協議会」(2011-2017年)などがあり、北海道立地質研究所外部有識者懇談会メンバー(名称変遷多: 2008-2022年)ほかを務めた。

日本地質学会の大会地で巡回開催される地質情報展は2007年9月に札幌市で開催され(吉田, 2009)、北海道立地質研究所などとの企画・調整・連携に尽くした。また、2008年の「地質の日」記念行事「ライマンと北海道の地質」(於:北海道大学総合博物館など)に参画し(在田, 2009)、以降、2019年まで継続的に実施している。さらに、北海道地質調査業協会50周年事業が2008年に行われ、GSJとの連携調整を行った。

地質の日普及行事として、2009年7月に根室市民フォーラム(七山ほか, 2010)、2010年11月に浜中町ジオツアー、2012年11月にin・BETSUKAI(在田ほか, 2013)で講演した。また、北海道センター一般公開では、特別講演として、2013、2015、2017年に温泉や石について語り、例年では岩石鑑定団や地質相談を担当した。

この間に、GSJ各部署の協力をいただきながら、撤収に向けての試資料の選択・移管も行った。中でも貴重な戦前の千島列島調査にかかる資料類や岩石標本類(北海道支所創設に尽力され三代目支所長の根本忠寛^{ただひろ}氏により寄贈された)を、それぞれ2013年と2015年につくばセンターへ移管した。上記の業務をこなして筆者は2017年3月に定年退職した。

3. 終わりに

定年退職後も、北海道センター産学官連携推進室(2015年より改称)のシニアスタッフとして再雇用され、地域ニーズに応える委員会活動などを継続した。偶然ではあるが、産総研理事長が北海道大学での「地質の日」記念展示を私事視察し、産総研イントラのコラム中録通信「意心伝信」

1) 元産総研 北海道センター産学官連携推進室

キーワード: 北海道産学官連携センター, 北海道支所, 地質調査連携研究体, 産学官連携センター, 地域ニーズ, サイエンスキャンプ, 地質図展, 地質の日, 地質情報展, 温泉

第81回(2017年5月9日付)で触れられたことが話題となった。

「地質情報展 2018 北海道」の準備に協力するも、北海道胆振東部地震に見舞われ、翌年3月の「地質情報展 2019 北海道」に延期になった(野々垣ほか, 2019)。また、足掛け15年の長期にわたり務めた北海道環境審議会温泉部会専門委員に対し、「温泉関係功労者環境大臣表彰」を授かった(森尻, 2019)。

コロナ禍で行動が制限されていた2020, 2021年、北海道センターの図書棟閉鎖に伴う資料発掘で支所創設期の写真が見つかり、GSJ地質ニュースに「黎明期の北海道支所」として投稿できたことは幸いであった(中川, 2021)。よもやこのような形で「撤収期の北海道支所」をまとめることになるとは思わなかったが。

「GSJ140周年」の企画に敬意を表するとともに、その実現に尽力された広報アウトリーチ推進チームのみなさまに感謝いたします。特に、寄稿依頼の実務と内容の相談に応じていただいた渡辺真人氏に厚くお礼申し上げます。

文 献

在田一則(2009)「地質の日」記念企画展示「ライマンと北海道の地質—北からの日本地質学の夜明け—」。地質ニュース, no. 653, 20-23.

在田一則・石井正之・重野聖之・中川 充・池田保夫・石渡一人・七山 太(2013)2012年地質の日普及行事 in・BETSUKAIならびに根室市ガッカラ浜での北海道内の教育機関贈呈用の巨大津波堆積物剥ぎ取り作成作業に関する報告。GSJ地質ニュース, 2, 114-115.

「北海道の地質図展」開催事務局(2003)北海道で地質図展開催。地質ニュース, no. 582, 46-50.

金原啓司(2001)地質調査連携研究体。地質ニュース, no. 559, 16.

森尻理恵(2019)北海道センターの中川 充氏が環境省第38回温泉関係功労者に表彰されました。GSJ地質ニュース, 8, 311.

中川 充(2021)黎明期の北海道支所—発掘された未公開写真から—。GSJ地質ニュース, 10, 9-14.

七山 太・中川 充・池田保夫・高野建治・猪熊樹人・高井文子(2010)“地質の日”企画, 根室市民フォーラム“道東の自然と科学教育を考える”, 津波エキシビジョンおよび津波ジオツアー実施の社会的意義。地質ニュース, no. 669, 61-65.

野々垣 進・斎藤 眞・宮地良典・藤原 治・伊尾木圭衣・内野隆之・昆 慶明・藤井孝志・角井朝昭・森田啓子・阪口圭一(2019)「地質情報展 2019 北海道—明治からつなぐ地質の知恵—」開催報告。GSJ地質ニュース, 8, 217-219.

高橋裕平(2000)サイエンスキャンプ2000“地質調査所北海道支所”。地質ニュース no. 555, 40-47.

吉田朋弘(2009)地質情報展 2007 北海道「熱くゆたかなぼくらの大地」開催報告。地質ニュース, no. 656, 63-68.

NAKAGAWA Mitsuru (2022) Hokkaido Collaboration Center.

(受付: 2022年6月13日)